チェーザレ・パヴェーゼの文学と流刑体験
書簡、証言、公文書、文学作品を用いた比較研究

なかじま　あづさ
中島　梓

本論文では、イタリア人作家チェーザレ・パヴェーゼ（Cesare Pavese, 1908-1950）の流刑体験が、彼の文学に及ぼした影響について再考察した。その結果、北イタリアの丘に囲まれた都市トリーノの作家パヴェーゼにとって、南イタリアの海辺の村で過ごしたわずか 7 か月余りの流刑生活は、その後展開されてゆくことになるパヴェーゼの作家活動および彼の文学作品にとってまさに原初的ともいえる、極めて重要な体験であったということを明らかにした。

従来のパヴェーゼ研究において、その流刑体験について検討がなされる際、そこではパヴェーゼ自身によって書簡や文学作品のなかに語られ、描き出された流刑に基づき考察がなされてきた。ただし、そうした一連の考察のなかでは、当のパヴェーゼ自身が、流刑地での人々との交流や、流刑地での日々の暮らしについて、他者に向けて語ることがそれほど多くはなかったために、その流刑生活の実態に関する検証等はほとんど試みられてこなかった。

そこで本論文では、パヴェーゼ自身による語りにのみ着目するのではなく、他者によってパヴェーゼの流刑がいかに語られ、記録されていたのかという点にも着目した。他者による語りを検討する際には、とくに当時を知る村人らによって語られた流刑囚パヴェーゼの様子を、1991 年に、エッセイ『神話という流刑をめぐって』（原題：*Al confino del mito*）にまとめて公表した、ジョヴァンニ・カルテーリの研究成果をもとにして、他者の目に映ったパヴェーゼの流刑生活の実態把握に努めた。

また、他者によって記録された流刑に関しては、ローマ国立中央公文書館に保管されている、政治的流刑囚チェーザレ・パヴェーゼに関する一連の公文書資料に着目し、パヴェーゼを取り締まり、監視する人々の目から見たパヴェーゼの流刑生活の実態把握に努めた。

こうしてパヴェーゼ自身による語りと他者による語りの両面に目を向けながら彼の文学作品、なかでも流刑を主題とする短編「流刑地」（原題：*Terra d’esilio*）および長編「牢獄」(原題：*Il carcere*)とを改めて取り上げて比較考察することにより、従来なされてきた作品の解釈とは異なる読みの可能性を、本論文内では明らかにするとともに、他者による語りや記録にも目を向け、パヴェーゼの流刑生活の実態把握に努めたことによって明らかとなった、パヴェーゼの流刑をめぐる従来の先行研究上の明らかな誤りについても、本論文内では指摘した。